



今回は抗がん剤の副作用の腎臓・膀胱機能障害について紹介します。

☆抗がん剤の副作用について～その 10～腎臓・膀胱機能障害について☆

腎臓・膀胱に与える影響

腎臓は尿をつくり出すことによって、体内の水分量や塩分量の調節をして、体内の不要な物質を身体の外に出す働きを主に行っています。

抗がん剤の中には、腎臓の細胞(尿細管)を障害するものがあります。このために腎臓の働きが低下し尿量が減少することによって、体重の増加・むくみ・高血圧・頭痛・動悸・息苦しさなどの症状が現れることがあります。症状の出現時期などは、抗がん剤の種類・量などによって異なります。また、膀胱の粘膜が傷害をうけると、血尿などの症状が現れることがあります。



腎臓や膀胱の働きを障害しやすい抗がん剤

白金錯体制剤: シスプラチン(商品名: シスプラチン点滴静注)

葉酸代謝拮抗剤: メトトレキサート(商品名: メトトレキサート点滴静注液)

腫瘍抗生物質製剤: マイトマイシンC(商品名: 注射用マイトマイシンC) など

アルキル化剤: イホスフォミド(商品名: 注射用イホマイド)

シクロホスファミド(商品名: エンドキサン注)

腎臓の働きの低下を起こさないために

腎臓の働きを低下させないためには、予防していくことが大切です。

予防策として、抗がん剤投与の前後にたくさんの点滴を行い、尿量を増加させ、抗がん剤が速やかに身体の外に排泄できるようにします。尿量が十分に保たれない場合は、くすり(利尿剤など)を使って尿量を増加させるようにすることもあります。

* 一日に大量の点滴を行うと

- ① トイレに行く回数が多くなります。
- ② 急速に身体の中の水分が増え、心臓や肺に負担がかかることがあります。動悸・息切れなどの症状が出現したら、すぐに主治医などへ伝えましょう。

* 腎臓の働きを調べるために

- ① 尿量減少がないか調べるために、尿をためて(蓄尿して)もらうことがあります。
- ② 決められた時間に体重測定を行うことがあります。



☆抗がん剤治療後の飲水のすすめ (抗がん剤の排泄について)☆

抗がん剤治療後、どれくらいの時間薬が体の中に残っているか質問されることがあります。

ほとんどの抗がん剤は、投与されてから24-48時間以内に80-90%が尿や便などから排泄されます。そんなに早く排泄されてはもったいないと思われる方も多いようですが、効果は排泄時間とは関係ありません。むしろ、排泄されないことにより、作用が強く現れて副作用が強くなる場合があります。また抗がん剤によりがん細胞が破壊された物が血液中に放出されると腎臓に負担がかかることもあります。

治療後は水分を十分補給し、尿意を我慢せず尿量を増やすことで、薬剤の排泄を遅延させないようにし、がん細胞が破壊された物の排出を促し、腎臓への負担を軽くすることが大切です。